

佳作

今も未来も私らしく

青森県八戸市立江陽中学校

2年 工藤 彩葉

物心ついてから、姉と比べられることが嫌いだっただ。2歳上の姉は、何でもできて、周りからの評価も高い。一方の私は、メンタルが弱くて、つまずくとすぐに諦めてしまう。同じ血が流れ、2歳しか離れていないはずなのに、なぜ、こんなにも違うのか。比べられるのが嫌なはずなのに、自分でも比べてしまう。

でも、私は姉のことが好きだ。恥ずかしいから本人には言ったことがないが、私の尊敬する人だ。尊敬し、憧れる一方で、どこかにねたましさがああり、自己嫌悪に陥る。

「生まれながらの才能があっていいな。私も欲しかったな。」
と。学年が上がっていくにつれて、姉との差が開いていくばかり。

小学校6年の3月。クラスの仲間は、中学校への入学に胸を躍らせていた。そんな中、私の悩みはますます大きくなっていった。4月には、中学3年になる姉は、生徒会長としてバリバリ活躍していた。学年のいろいろな行事や部活動でも中心になって活動していた。勉強でも、結果を出していた。

「小学校より、中学校ではお姉ちゃんとの差が目立ちそうだ。どうしよう。やっぱり、比べられちゃうかな。」

心の中で何度も不安をつぶやいた。小学校の卒業が近づくにつれ、中学校への入学に怖さが増すばかりでつらかった。そんな私の様子に気づいたのだろうか、母が

「最近、暗い顔しているけれど、大丈夫？」
と、気にかけてくれた。隠しておくつもりだった。母に心配をかけたくないから。でも、誰かに打ち明けたくて、とうとう母に相談した。

「お姉ちゃんと比べられるの、怖くてさ。不安なんだ、中学校に上がるの……。」
涙がどんどん流れていった。ずっとたまっていた涙だった。こらえていた私の気持ちだった。母は、落ち着いた声で、

「彩葉は彩葉で、お姉ちゃんにはない良いところ、いっぱい持っているでしょ。お母さん、知ってるよ。彩葉だけの良いところ。彩葉は彩葉。もっと自分に自信を持って。」

私の手を握って、こう言ってくれた。母に言えたことで、気持ちがだいぶ軽くなった。

ついに、入学式の日。新しい制服に照れながら、中学校へ向かった。教室で

の担任の先生のお話の後、いよいよ式が始まった。生徒会長である姉が壇上で「歓迎の言葉」を述べた。新入生の私たちを迎えるにあたり、その心構えを説得力ある言葉で姉は語った。私たち新入生を、もれなくしっかりと見渡しながら語る姿に、心底かっこいいと思った。

「彩葉のお姉ちゃん、かっこいいね。」

式の後、クラスの仲間に、口々にそう言われちょっと嬉しかったが、複雑な気持ちだった。

忙しく中学校生活は進んだ。小学校気分では、どんどん置いていかれる。こんな忙しい中学校生活の中、生徒会長、部活動、学年の仕事、勉強……、全てを完璧にやり遂げてきたのだ姉は。みんなより早く部活動に行って多く練習していた姉。夜遅くまで、勉強していた姉。早起きをして、英語のCDを聞き、弁論大会の練習をしていた姉。いろいろな場面の姉の努力の姿が、頭に浮かんだ。

「彩葉のお姉ちゃん凄いな。」

比べられることは、やはり、多かった。けれども、努力する姉の姿を想ったら嫌ではなかった。姉は、才能に恵まれただけではない。努力の人だった。そのことを知っている私は、もう、比べられても嫌ではなくなっていた。

3月、姉の卒業式。答辞を読む姉。多くの人がその見事さに泣いていた。最後の最後までかっこよかった。ずっと、比べられることを嫌悪しながらも姉の姿を追いかけてきた私。姉の努力の姿から、私自身の甘さや弱さに気付いた。

「いつか絶対に、比べられないくらいに努力して、姉に追いつく。」

そんな気持ちが私の中に芽生えていた。「努力は報われる」という言葉があるように、努力した分だけ実力が付く。私は、今、とても前向きな気持ちで日々努力している。

姉は将来、幼い頃の病気をした体験から、医療機器の開発に携わることを目指して勉強中だ。私は、自分たちの住んでいる町を自分の手でより良くしたいという思いで、公務員を目指している。

10年後、私も姉も、それぞれの人生を歩んでいるだろう。今、考えている仕事に就いているかはわからない。でも、ひとつだけ言えるのは、私はもう、姉と対等な大人同士の関係を築いているだろうということ。なぜなら、私の憧れの姉は、努力でできていたから。私も、私らしく、何事にも挑戦し、努力を続けているだろうから。